

中部の

エネルギーを 築いた

人々

名古屋電灯創設を仕掛けた 宇都宮三郎

宇都宮三郎(1834~1902)は、伊藤圭介、柳川春三と共に幕末維新期、学術文化の面で活躍した尾張藩3偉人の1人と言われる。わが国化学工業のパイオニアで、「化学」という言葉も彼の提案で使われるようになった。



宇都宮三郎

宇都宮三郎の生涯

宇都宮三郎は、天保5年5月、名古屋に生まれた。尾張藩士上田帯刀の許で西洋砲術を学び、嘉永6年に江戸勤務を命じられた。築地の尾張藩邸の砲台建設に携わり、洋学者たちと交流し、安政4年洋学研究のために脱藩した。脱藩後、着発弾の発明、鉄製ガルハニの製造など軍事科学で成果を挙げ、幕府の蕃書調所精錬方に出征した。維新後は開成学校中助教を経て工部省に移り、セメント製造、耐火煉瓦製造、曹達製造、藍染色、電信柱の防腐(丹礬注入)等を手がけ、明治15年には技

官としては最高位の工部大技長となった。

明治17年の退官後は、福沢諭吉の主催する交詢社に身を置き、民間人として殖産興業に尽力し、また改良窯・清酒醸造法を研究して『築電論』、『醸酒新法』を表わした。福沢諭吉は、「化学は其最も長ずる所にして、殊に其所得の学理を人事の實際に適用するの才力に至りては…他人の企て及ぶ所にあらざるを知るべし」と宇都宮を評している。

東洋組設立と知多醸酒業の指導

宇都宮は活動の拠点を名古屋に戻すことはなかったが、東洋組、知多醸酒業、名古屋電灯創設などで郷里愛知の産業に貢献した。

明治13年、県令国貞廉平から士族授産への助言を求められ、宇都宮は「士族生産談話会」の設置や事業の中心となる斎藤実克を紹介した。士族の結束を図る「士族生産談話会」が西尾、刈谷、岡崎、豊橋、田原に置かれ、これを受け皿に東洋組(社長：斎藤実克)が創設された。三条実美ら華族の出資も受け、西尾・刈谷の煉瓦

製造、田原のセメント事業等を進めたが、予定した砲台建設用煉瓦の注文が中止となり、2年足らずで事業は瓦解して、三河セメントや平坂・刈谷の煉瓦事業に引継がれた。

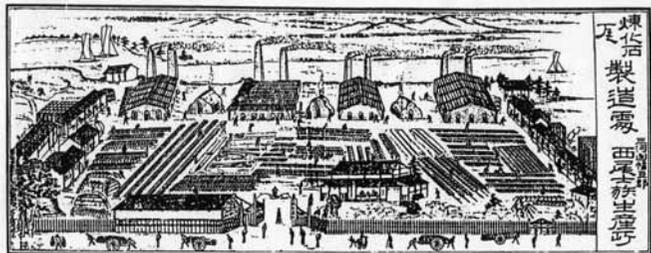


図3-92 東洋組西尾分局(『参備商工便覧』川崎源太郎、明治21年、複製版昭和52年より)

西尾煉瓦製造所

一方、知多の醸酒業は当時灘(兵庫)に次いで国内第2の生産を誇っていた。明治16年宇都宮は招かれて改良電の講話をしたが、醸酒業者たちは彼の助言を入れて酒造用電を改良し、「鍊業会」を結成して醸造試験所(猿若分析所)を設けた。宇都宮はしばしば亀崎^{もと}に出向いて醸酒改良に取り組み、従来の酏^{もろ}に代えて醪^{もろ}を使用する新しい醸酒法を考案した。明治26年に宇都宮の指導した清酒「全勝」が発売されたが、翌年日清戦争が勃発し、



清酒「全勝」

出征軍の祝賀会ではこの銘が喜ばれ、爆発的な売れ行きを示した。

名古屋電灯会社の創設

明治18・19年、旧名古屋藩士族への国の勤業資金10万円の貸与が決まったが、事業選択をめぐる意見が分かれた。電灯事業に決定したのは宇都宮の助言が大きかった。その発端には宇都宮と県側担当者丹羽精五郎の運命的な出会いがあった。浜松から名古屋に転任してきた丹羽が、紹介された借家を訪ねたとき今までの借主宇都宮と出会った。誘われて宇都宮を宿に訪ね一夜を語り明かした丹羽は、「宇都宮と一面識なれども其夜の談論により一見旧知の如く両者



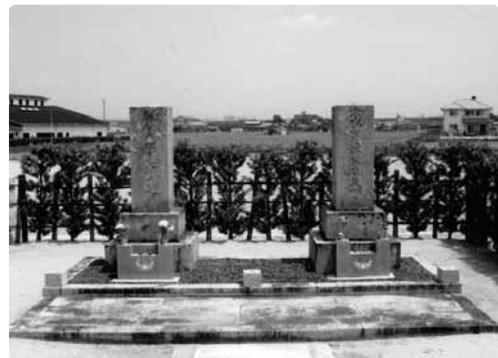
丹羽精五郎

肝胆相照らすことを得て非常に喜べり」と後に語っている。

県令勝間田稔から士族授産の特命を受けた丹羽は、上京して宇都宮の意見を求めた。このとき宇都宮は「一旦設備を完成し終れば敢て多額の運転資本を要せず、その経営自ら安固堅実なるものあり、加ふるに電灯を以つて油灯に比すれば、その利便固より同日の論に

非ず将来益々大に需要を喚起するに至るべきは必然にして、時勢の如何によりて浮沈を見る憂無く、貨殖の道に慣れざる旧藩士卒にして之を経営するも、大過無きを期し得られるべし、請ふ帰って電灯業の有利なるを鼓吹せよ」(『名古屋電灯株式会社史』)と語り、電灯事業を強く薦めた。宇都宮の提案に勝間田県令も賛同し、難航した電灯事業創設が決まったのだった。(浅野伸一)

名古屋電灯中央電灯局(発電所)



宇都宮三郎の墓所と生誕地(案内板)